鹿児島女子短期大学紀要
第39号（2004）147～164頁

ピアノ伴奏の手法とその指導法の研究（Ⅴ）

――歌唱教材「花」「菩提樹」からの考察――

Piano Accompaniment: Techniques and Instruction (Ⅴ)

— Teaching Materials for Singing Practice as Exemplified by “Hana” and “Der Lindenbaum” —

寺　薗　玲　子
Reiko TERAZONO

1．はじめに

音楽教育の現場において，特に歌唱指導の場合，ピアノ伴奏が重要な役割を担っていることは，これまでピアノ伴奏の手法とその指導法の研究（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）（Ⅳ）でも述べてきた。

新小学校学習指導要領等の新しい教育課程の基準が，平成14年度から実施されたことに伴い，学校現場での教材への選択や取り組みについても，これまでより一層の創意工夫がなされているところである。しかしその一方，小学校では「表現」の歌唱共通教材はこれまで同様に４曲ずつあげられているが，鑑賞教材に関しては具体的な曲目でなく，より幅広い中での選択が可能になった。つまり教師の力や音楽性がますます要求されるようになったことと考える。中学校の場合も，表現教材の歌唱教材に関しては具体的な教材の指示ではなく，（ア）我が国で長く歌われ親しまれているもの（イ）我が国の自然や四季の美しさを感じ取れるもの（ウ）我が国の文化や日本語の持つ美しさを味わえるものと，教材の選択はこれまで以上に広範囲で現場の教師の実力がますます発揮できるよろこばしいことの陰に，次世代に是非歌い継いでいきたい日本や世界の名曲が消えていく傾向を感じざるをえない。

本短大の場合もこれまで述べてきたように，わずか２年間で修得した技術をもって現場に臨んでいく学生達が不安をもっていることを杞憂し，如何に力をつけさせ自信をもたせていくかということを常に考慮に入れながら指導の任にあたりたいと考えつづけている。

ピアノに関しては，毎年入学時に学生への調査を行っているが，ここ10年間の統計では約３割程度の学生たちが初心者である。学生達の個々の能力に応じた指導が要求されるわけである。如何に音楽的に表現できるかを目標に，楽譜に可能な限り忠実で，しかも個々の限られた技術をもって，保育や教育の現場で子どもたちと楽しく歌っていけるピアノ伴奏をと創意工夫する日々である。

鹿児島県総合教育センターが「教職員の実践的指導力の向上」をはかることを目標に，地区，学校での実践・研究を支援する講座を実施しておられる。ここ10数年来教育センターの依頼を受け「歌唱表現を豊かにする伴奏」の内容で，小学校教員25人程度を対象に指導してきたが，今年度は平成15年７月29日・30日の２日間，みやまコンセールの協力・配慮をいただくことができ音楽ホー

ルでの実技講座（霧島国際音楽ホールみやまコンセールを利用して）が実現した。対象者は例年と異なり，中学校教員13人，高等学校教員１人，養護学校教員２名の計16人であった。第24回霧島国際音楽祭がみやまコンセール等で行われている最中でもあり，受講生は世界超一流の演奏を鑑賞する機会にも恵まれ，また最高のホール・音響の中で充実した研修ができたことは，現場での指導にも大いに生かされていくことと喜ばしく思うことである。

全ての分野に共通することであるが，本物にふれる機会を多く持つことが，教師にとっても，勿論子どもたちにとっても望ましいことは明白であり，即ち豊かな感性・音楽性へと結びつくことである。

今回は，実技研修の為の教材を受講者がそれぞれに自身で演奏する楽譜を用いることになった。ピアノ伴奏の教材に使用された曲目は，「春に」（谷川俊太郎作詞・木下牧子作曲）や「時の旅人」（深田じゅんこ作詞・橋本祥路作曲）など，比較的高度なテクニックや音楽性を要求される合唱曲のピアノ伴奏や，「花」「浜辺の歌」「夏の思い出」などこれまで歌唱教材に取り上げられている代表的な日本歌曲などと多様な選曲になっていた。実技研修が受講者それぞれに成果があり，今後教育現場で生かされ，また一層の精進･努力をされることと期待している。

上記の曲にも登場してきたが，2003年の今年は，瀧廉太郎（1879～1903）の没後100年ということもあり，大分・竹田市では「荒城の月」など，また東京・麹町では「鳩ぽっぽ」など瀧廉太郎を偲んで彼の作品を演奏する音楽会が開かれた。ちなみに，筆者は，昨秋2002年９月の川辺町文化会館での『寺薗玲子コンサート』で，「瀧廉太郎の世界」のステージを設け，「鳩ぽっぽ」「お正月」「水あそび」などの幼稚園唱歌から「荒城の月」「箱根八里」などの唱歌や，組曲「四季」より「花」や「月」等，わずか２曲のピアノ作品である「メヌエット」と遺作となった白鳥の歌「憾（うらみ）」を演奏できたことを幸せに思っている。

彼の代表的な作品でもあり，今なお愛唱歌として歌い続けられる，日本の曲「花」と，以前は中学校の教科書では必ずといってもいいほど目にした，旧制中学や旧制高校の先達もドイツ語の原語で愛唱した外国の曲で，歌曲王シューベルトの「菩提樹」をとりあげ，今回の伴奏の手法についての教材にして研究していくことにする。

これまでのピアノ伴奏の手法とその指導法の研究（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）（Ⅳ）の「赤とんぼ」では旋律を含む和音伴奏の奏法やペダル奏法を中心に，「牧場の朝」では左手分散和音の奏法や無理なく自然に音を出せるようなタッチなど，「早春賦」ではアルペジョ奏法，「待ちぼうけ」「この道」では間の取り方や簡易伴奏の工夫などを考慮に入れながら研究してきたが，今回の「花」や「菩提樹」では，より芸術的に美しい演奏ができるための奏法や楽曲やその背景等についても研究していきたいと考える。

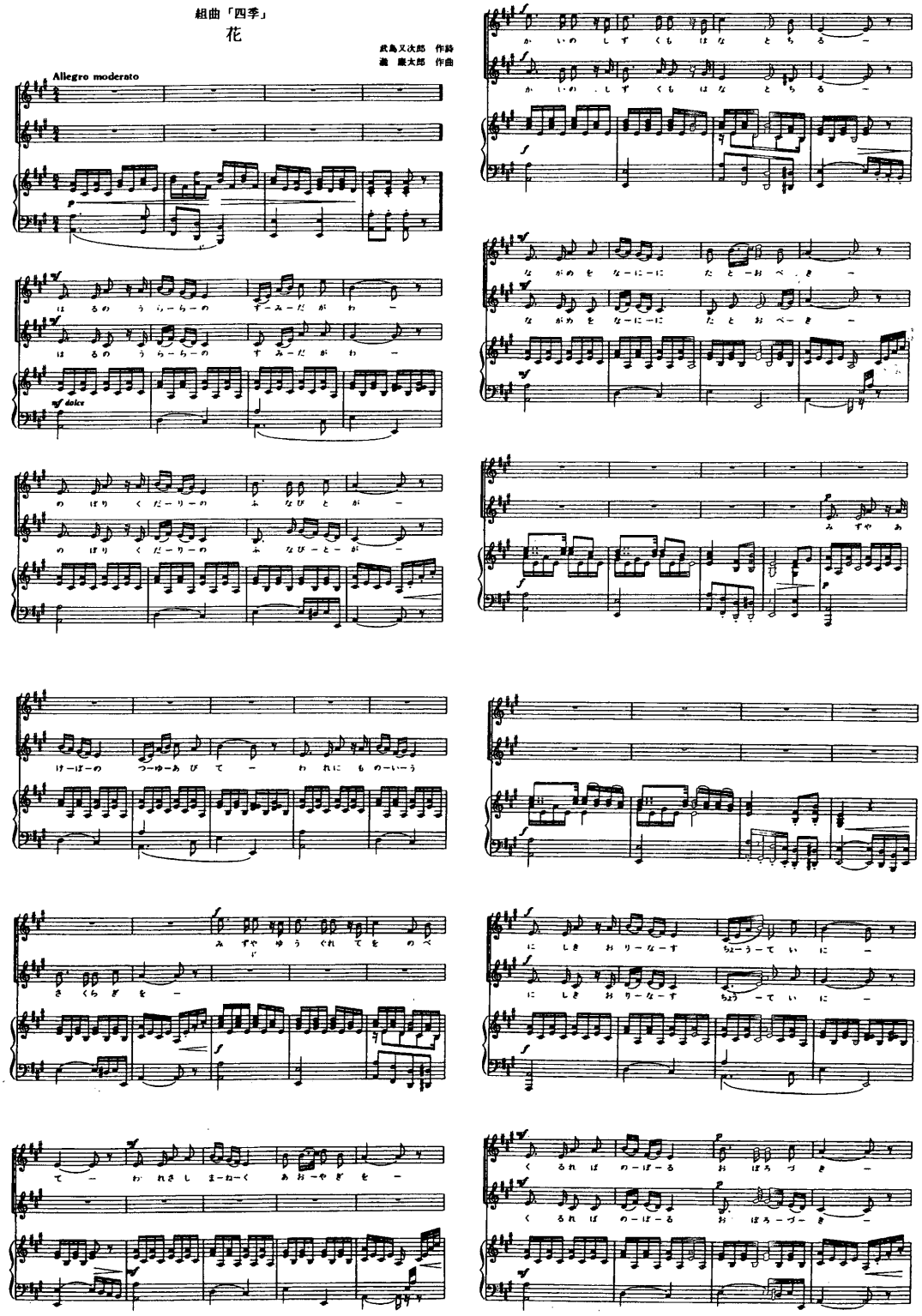
２．楽曲「花」「菩提樹」について

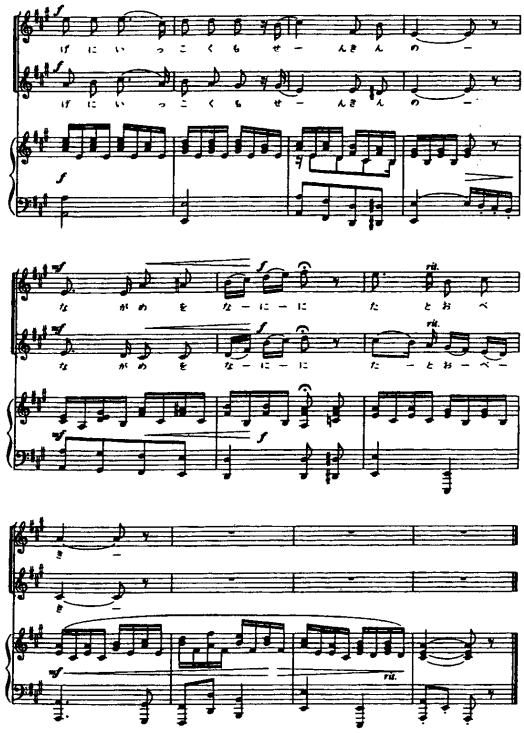
（１）「花」について

武島又次郎（羽衣）作歌・瀧廉太郎作曲による「花」は，瀧廉太郎の組歌「四季」の四部作の１

曲目にあたる。この組歌は春夏秋冬にちなんで作曲されて「花」「納涼」「月」「雪」の四部作になっている。我が国で作曲された最初の合唱曲であるということも特筆すべきであろう。原調はイ長調，4分の2拍子，速度はAllegro moderatoと記されている。原調はイ長調であるが，現場では長2度低いト長調で歌われることのほうがより多いと考える。

楽譜1　「花」





楽譜１「花」は原調のイ長調である。
小長久子編「瀧廉太郎　全曲集」（音楽の友社）の瀧廉太郎の組歌「四季」四部作の中の「花」を使用させていただいた。

【　花　】

作歌　武島又次郎（羽衣）

春のうららの隅田川　　のぼりくだりの船人が
櫂のしづくも花と散る　　ながめを何にたとふべき

見ずやあけぼの露浴びて　　われにもの言ふ桜木を
見ずや夕ぐれ手をのべて　　われさしまねく青柳を

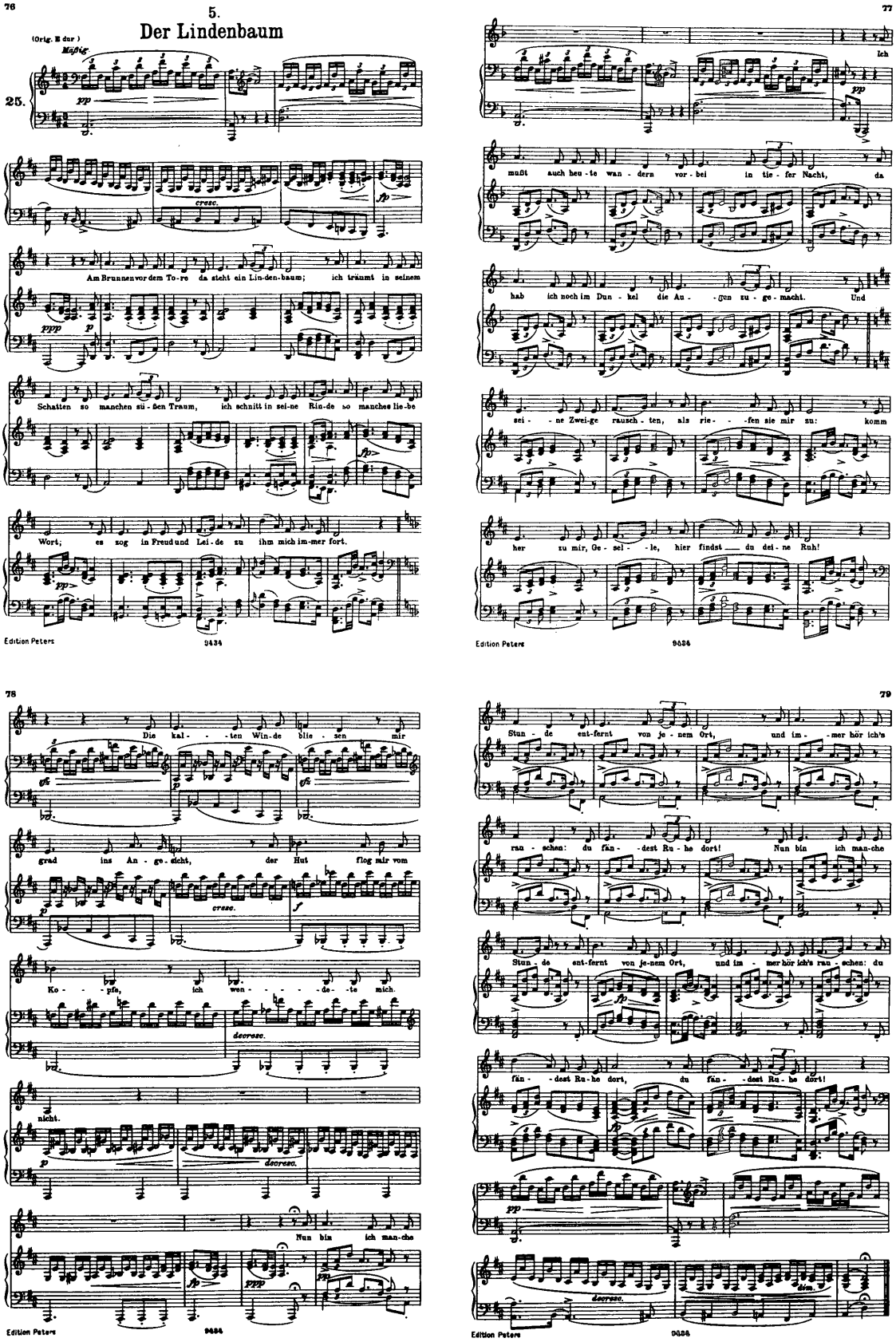
錦おりなす長堤に　　くるればのぼるおぼろ月
げに一刻も千金の　　ながめを何にたとふべき

（２）「菩提樹」について

歌曲王として知られるウィーンの作曲家・シューベルト（1797・１・31～1828・11・19）の限りなく美しい作品のひとつにあげられよう。僅か31年の短い生涯の中で約600曲にものぼるリート（歌曲）を書いているが，歌曲集「冬の旅」は彼の死の前年，1827年に書かれた24曲からなり，「菩提樹」はその第５曲目にあたる。詩はその４年前に書かれた「美しき水車小屋の娘」と同じウィルヘルム・ミューラー（1794～1827）によるものである。

歌唱教材として教科書に登場している訳詞者は，近藤朔風（1880～1915）である。「野ばら」「ローレライ」など美しい訳詞はあまりにも有名である。

楽譜２　「Der Lindnbaum」



原調はホ長調，4分の3拍子，速度はMäßigと記されている。教科書で混声三部合唱として掲載されたものは変ホ長調である。教科書の教材では，同じ旋律を2番までの歌詞で合唱するように編曲されていたが，ここでは原曲全体について検討していきたいと考える。「菩提樹」に限らず，名曲の一部の学習を通して原曲にふれる機会が多くなっていけばと願っている。

昨年来，筆者がリサイタル伴奏をつとめさせて頂いている，日本のバス・バリトン歌手の第一人者で，二期会副理事長の池田直樹氏との今回のプログラムにも「冬の旅」が取り上げられていることから，ここではニ長調の楽譜を使用させていただくことにする。

鹿児島県総合教育センターの研究主事・田中真一郎氏のご協力を頂き，県内の中学校の音楽の教科書と内容についての資料を調べてみた結果，「菩提樹」に関しては現在歌唱教材からは姿を消している状況である。

しかし，学習指導要領の目標にかなった最もふさわしい教材の一つにあげられまいか。詩情を生かした表現の工夫や，明日への希望をこめた明るい声の合唱を目標として嘗て大切に歌われたこの曲に，再び光をあてたいと願うのは筆者だけだろうか。楽譜2が「菩提樹」のニ長調の楽譜である。使用楽譜はペーター版の低声用である。

【　Der Lindenbaum　】

Wilhelm　Müller

Am　Brunnen　vor　dem　Tore,	市門の前の泉のほとりに
Da　steht　ein　Lindenbaum,	一本の菩提樹が立っている
Ich　träumt　in　seinem　Schatten	私はその木陰で夢を見た
So　manchen　süßen　Traum.	数々の甘い夢を
Ich　schnitt　in　seine　Rinde	私はその樹皮に彫った
So　manches　liebe　Wort;	数々の愛の言葉を
Es　zog　in　Freud'　und　Leide	喜びに悲しみにつけ惹かれた
Zu　ihm　mich　immer　fort.	私はいつもこの菩提樹の木に
Ich　mußt'　auch　heute　wandern	私は今日も又旅を続けなければならない
Vorbei　in　tiefer　Nacht,	深い夜の闇の中を
Da　hab'　Ich　noch　im　Dunkeln	私はこの暗い闇の中で
Die　Augen　zugemacht.	じっと目を閉じた
Und　seine　Zweige　rauschten,	すると菩提樹の枝がサワサワと音を立てる
Als　riefen　sie　mir　zu:	まるで私に呼びかけるように
Komm　her　zu　mir,　Geselle,	友よ　私のそばにおいで

Hier findest du deine Ruh!	ここにお前の安らぎがあるよ！
Die kalten Winde bliesen	冷たい風が吹きつける
Mir grad ins Angesicht,	さっと私の顔に
Der Hut flog mir vom Kopfe,	帽子が私の頭から飛んだ
Ich wendete mich nicht.	私は振り向かなかった
Nun bin Ich manche Stunde	私はもう長い間
Entfernt von jenem Ort,	あの場所から遠ざかっている
Und immer hör ichs rauschen:	でも，いつも私にはあのざわめきが聞こえる。
Du fändest Ruhe dort!	お前はあそこに安らぎを見いだすと！

（寺薗玲子　訳）

ドイツ歌曲に限らず，筆者の場合，共演者とのリサイタルの曲目が決まると，先ず歌詞についての研究からはじまる。当然のことながら，単語の意味を調べて全体の意味を把握することから始める訳である。ドイツ歌曲にしてもその他の外国の歌曲にしても，大抵の場合，大切な言葉が重きを置く音になることが多い。高い音であったり，長い音であったり，アクセントで強調される場合だったりと様々であるが，一様に作曲者が如何に詩を言葉を大切にしているかが一目瞭然である。次に旋律の動きに注目してみると曲の表情が感じ取れてくる。フレーズやアーティキュレーションが句読点の役目を果たし，音のかたまりとなって一つの模様を織り成して行く。すると，それぞれの音の持つ意味合いが読めるようになり，次に，どのような音で演奏されなければならないかを考えるにいたる。そこで，テクニックが必要になるわけである。テクニックは音楽的な表現のできる演奏技術と，それを実際の演奏で駆使できるメカニック，いわゆる技術に分けられる。如何に解釈していくか，如何に演奏していくか，どうすればより自然で美しい演奏が可能か，共演者や子どもたちの音楽性をさらに豊かに表現できる手助けになるのかと，ピアノ伴奏の役割は限りなく興味深く，実に楽しいものなのである。

３．瀧廉太郎と武島羽衣について

2003年（平成15年）の今年は，瀧廉太郎の没後100年にあたる。1879年（明治12年）８月24日東京市芝区南佐久間町で生まれ，当時官吏をしていた父・瀧吉弘の転勤に伴い横浜，富山，東京・麹町，大分・竹田と居を移している。父・吉弘が内務省で大久保利通，伊藤博文の秘書を務めていた時代に廉太郎が生を受けている。1890年には父・吉弘は故郷の大分に帰り，後に大分の郡長になっている。竹田の高等小学校時代，廉太郎の受け持ちの後藤由男先生が唯一人学校に一台あるオルガンを弾けたこともあり，廉太郎は放課後になるとそれを弾かせてもらい，やがては「君が代」や式の歌の伴奏を弾くようになったと記されている。1894年（明治27年）東京音楽学校に入学する。東

京音楽学校の歴史は，1879年文部省内に設置された音楽取調掛にはじまっている。当時アメリカ留学から帰ったばかりの伊沢修二が，御用掛をおおせつかって開いたもので，1887年に東京音楽学校となって，伊沢修二が初代校長を務めている。廉太郎は16才で音楽学校入学後，数多くの音楽会に出演，18才で学友会音楽会でのピアノ独奏の初演を契機に同声会・学友会などの音楽会で次々にピアノ演奏活動を行った記録が残されている。音楽学校の講堂（奏楽堂）での廉太郎の演奏の写真からも当時の懐かしいピアノの音が聴こえてきそうである。筆者も，今は上野公園の一隅に移設されている奏楽堂を訪ね，多くの資料を閲覧させて頂く機会を得た。舞台に立って，当時の瀧廉太郎がどのような気持ちでピアノに向かい演奏したろうかと，思いを馳せた。これをきっかけに筆者自身も，彼の作品をいろいろな機会に演奏している。1898年（明治31年）最優秀の成績で音楽学校を卒業。卒業生を代表して謝辞も述べたそうである。卒業演奏にはクレメンティのソナチネを演奏したそうであるが，その当時としては卓越した演奏だったに違いない。我が短大の学生達も，入学後バイエル教則本などの基礎を学んだ後クレメンティ作曲のソナチネを学んでいるが，この100年の間の我が国の西洋音楽の発展は驚きである。廉太郎はその後研究科に進んでケーベル博士の下でピアノ・作曲法を学んでいる。ケーベル博士は1893年帝国大学哲学部の教授としてドイツから来日。ドイツ・カールスルーエ音楽院でピアノ・音楽理論・音楽史を教えた経歴のある先生だが，日清戦争後音楽学校の外国人教師がみな帰ったあとだったので，廉太郎はケーベル博士の下で音楽一般を習ったと記されている。筆者の場合も，ウィーン国立音楽大学のピアノ伴奏科で学んだ恩師ロベルト・ショルム教授以下，和声学・初見・移調・通奏低音や楽器学などの指導を仰いだ教授はみな現代作曲家として現在作曲活動をしている先生方だった。思うに，廉太郎の音楽の出発点がケーベル博士だったことは，音楽的にも哲学的にも，また直接外国の生きた文化そのものにふれる当時としては実に恵まれた環境ではなかったかと考えるわけである。1900年（明治33年）10月１日にピアノ曲「メヌエット」が，続いて，８月に作曲された組歌「四季」が11月１日に出版されている。この当時の唱歌は外国曲に日本語をあてはめたものがほとんどである。たとえば「故郷の空」「埴生の宿」「蛍の光」に見られるように，美しい日本語訳ではあるが，やはり日本人による日本人の歌を必要とするという気持ちが廉太郎の論文から満ち溢れていると筆者も感じる。ここに瀧廉太郎自身による明治33年８月に書かれた組歌「四季」の序文をそのまま紹介させていただく。

【近来音楽は，著しき進歩，発達をなし，歌曲の作成に顕はれたるもの少しとせず。然れども，是等多くは通常音楽の普及伝播を旨とせる学校唱歌にして，之より程度の高きものは極めて少なし。其やや高尚なるものに至りては，皆西洋の歌曲を採り，之が歌詞に代ふるに我歌詞を以てし，単に字句を割当るに止まるが故に，多くは原曲の妙味を害ふに至る。中には頗る其原曲の声調に合へるものなきにしもあらずといえども，素より変則の仕方なれば，これを以て完美したりと称し難きことは何人も承知する所なり。余は敢て其欠を補ふの任に当たるに足らずといえども，常に此事を遺憾とするが故に，これ迄研究せし結果，即我歌詞に基きて作曲したるもの，内二三を公にし，以て此道に資する所あらんとす。幸に先輩識者の是正を賜はるあらば，余の幸栄之に過ぎざるなり。　　明治33年８月　　瀧廉太郎】

明治34年３月，文部省が中学校の音楽の教科書として「中学唱歌」を出版するにあたって新作を応募した時に出した「荒城の月」「箱根八里」「豊太閤」の３曲全部が採用された。西洋の音階であるドレミファソラシドの音階で書かれた最初の歌曲とよぶにふさわしいのは，何といっても「荒城の月」であろう。モデルとなったといわれる竹田の岡城址には，同郷竹田高等小学校の後輩で，彫刻家の朝倉文夫作の瀧廉太郎の記念像が立っている。大分市の彼の亡くなった家のあった遊歩公園の像と同じものである。筆者は，幸いに竹田の岡城址，そして作詞者の土井晩翠の詩碑を福島県会津若松の鶴ヶ城，仙台の青葉城と訪ねることができ，往時を偲び碑の前で一人口ずさんでみた。前年の明治33年（1900年）には，文部省留学生としてドイツに３ヶ月の予定で留学を命ぜられていたが，出発はかなり遅れて1901年４月６日であった。長旅の末，目的地ライプツィヒに着いたのは５月末のことだった。

10月ライプツィヒ音楽学校に入学後，感冒にかかり，志半ばにして帰国を余儀なくされることになる。文部省からの帰国命令を待ち，翌1902年（明治35年）８月帰国の途につく。途中ロンドンでは土井晩翠にも会っていると記されてある。ライプツィヒ在留の留学生達が最年少の廉太郎の為に送別会を催している写真を見ると，当時も医学や哲学や文学など我が国から多くの先達が異国で学んでいたことを知る手がかりとなり励まされる思いである。帰国後「別れの歌」「水のゆくえ」「荒磯」などを作曲しているが，11月末に大分の両親の家に落ち着くことになる。1903年（明治36年）２月14日，「白鳥の歌」となる最後の作品ピアノ曲「憾（うらみ）」を作曲したが，療養の甲斐なく６月29日，23年と11ヶ月の生涯を閉じている。ピアノ曲「憾」には，廉太郎のまだ生きて作曲活動をしていきたかったろう無念さや悲痛な叫びが聴こえてくるように感じられ，如何に演奏していこうかと，楽曲の構成や音色やフレーズや強弱やペダルのことなどを考えながら彼の短い生涯とを重ね合わせるのである。

「花」の作詞者，武島羽衣は本名を又次郎，1872年（明治５年）東京に生まれて，明治29年東京帝国大学国文科を卒業後，東京音楽学校や東京高等師範学校の教授をつとめた。「花」は東京音楽学校に赴任直後の羽衣が書いた詩に，同校の助教授の廉太郎が曲をつけた。羽衣28才，廉太郎21才の時であった。詩人で国文学者でもあった羽衣は，「花」の他「美しき天然」でも知られるが，1967年95才で天寿を全うしている。隅田河畔に「花」の歌碑が立ったのは昭和31年のことであった。

４．シューベルトとミューラーについて

音楽の都，ウィーン９区ヌスドルファー通りのシューベルトの生家には赤白の旗が掲げられ，今はウィーン市立のシューベルト記念館として保存・公開されており，音楽愛好家の必ず立ち寄る名所である。筆者のウィーンでの最初の演奏は，このシューベルトの生家であった。中庭を見下ろす２階の回廊にはゼラニウムの花などが飾られて美しい。

フランツ・ペーター・シューベルトは1797年１月31日，当時ウィーンの郊外の町であったリヒテンタールで生まれた。ウィーンで活躍した作曲家はモーツァルトやベートーベンやブラームスなど

数多いが，生粋のウィーン生まれの音楽家は，シューベルトとワルツ王のヨハン・シュトラウスⅡ世に代表される。父親のフランツはヒンメルプフォントグルント地区に学校を経営するまでになっていたが，シューベルトは6才で父の学校に入学，8才から父と聖歌隊の指揮者ミヒャエルホルツアーに音楽教育を受けることになった。11才でリヒテンタール教会聖歌隊の第一ソプラノになっている。リヒテンタール教会はシューベルトが洗礼を受けた教会であり，1814年教会が建立百周年の式典の折は，17才のシューベルトがそれを祝うためにミサ曲1番を作曲している。

教会入り口向かいの緑の中にもシューベルトの胸像を見るが，教会ではミサ曲はもちろんのこと歌曲の夕べ（リーダー・アーベント）などの音楽会も数多く催され，筆者も度々足を運んだものである。ウィーンのシュタットコンヴィクトに学び，小学校助教諭の資格を取った後，1814年から父の学校の教諭として勤務することになる。厳格な父の存在に息苦しささえあった彼が，よくウィーンの都心部にでかけ友人と交わり，作曲や音楽の楽しみに耽った様子は写真や絵画で推察できる。この間，定期的に宮廷楽長アントニオ・サリエリに作曲の指導を受けている。サリエリは当時ウィーンで最も実力のあった作曲家とされているが，シューベルトの師でもあり，筆者も卒業したウィーン音楽大学（ウィーンアカデミー）の初代の校長である。映画「アマデウス」でモーツァルト毒殺説のサリエリとしてひところ話題になったものであるが定かではない。筆者も，ウィーン音楽大学在学中に国立図書館ホールでの，恩師ロベルト・ショルム教授主催の『サリエリの作品を集めて』の音楽会でサリエリのピアノソナタや歌曲伴奏などを演奏させていただいたが，モーツァルトの作品と大変似通った作品が多い。古典派の音楽ゆえに当然のことではあるが，やはり演奏してみてモーツァルトの作品の方がはるかに洗練されているように感じた。恩師ショルム先生の歌曲作品伴奏・日本の現代曲作品演奏の録音と筆者の演奏記録も国立図書館に残されているはずである。ウィーンオペラ座近くの国立図書館ではシューベルトの楽譜や手紙なども保存されている。とにかくウィーンの街はどこを歩いても必ずといっていいほど芸術家達に関わる場所に出くわすのである。街そのものが音楽であり，芸術である。シューベルトの時代は，音楽の演奏の場としては，劇場の他に宮殿にある劇場や大広間，教会堂，大学の講堂，貴族や富豪の館やホテルのサロン，レストランやカフェや酒場，そして個人の家などと多種多様であった。全ての建物がすなわち音楽会場でありえたわけである。

市民階級の台頭の機運も反映して，王侯貴族の音楽から市民の音楽への転換の現象が見られる中で，こじんまりした会場ではシューベルトのリート（歌曲）などとてもふさわしい音楽であったに違いない。現在もシューベルティアーデと呼ばれる音楽会が毎年開かれ，シューベルトの作品が演奏されているが素晴らしい音楽会である。1814年から1817年にかけては320曲を越える歌曲（リート）を作曲しているが，ゲーテの詩による「糸を紡ぐグレートヒェン」「野ばら」「魔王」などの名曲がとりわけ親しまれている。さすらい人のシューベルトは生涯自身の家を持つことも無くウィーン滞在中に26ヶ所も住居を変えたといわれる。彼の尊敬するベートーベンは79ヶ所と言われているが，筆者は留学中に機会を見つけては，それらのヴォーヌング（住居）を訪ね，其の当時の作品とを結びつけて感慨に耽ったものである。シューベルトは又友人で歌手のフォーグルの生まれ故郷，名曲「鱒」で知られるシュタイヤーなどウィーン郊外にも度々足を運んでいる。サンクト・ペルテ

ンやザルツブルグやリンツ，グムンデン，グラーツなどでも数多くの作曲がなされていて，筆者は可能な限りその地に足を運び資料収集を何よりの楽しみとしている。600曲あまりの歌曲を作曲したといわれるシューベルトだが，1822年健康を害したが，翌1823年には何とか回復して５月から11月にかけて連作歌曲集「美しき水車小屋の娘」を書いている。ウィーンの西南20キロほどの所にメードリンクという町がある。ウィーンの森がプロイセンとの戦いから守られたという環境保全のモデルとしても知られたところである。岩壁と松に囲まれたメードリンク川をさかのぼると，保養地ヒンターブリュールに着く。それからハイリゲンクロイツの修道院の方に行くと，ヘルドリヒスミューレと呼ばれる，昔の水車小屋を思わせる建物がある。シューベルトは「美しき水車小屋の娘」を作曲するために訪れたということであるが，このヘルドリヒスミューレの入り口には，「Der Lindenbaum」（菩提樹）と書かれた記念銘板と瞑想に耽っているシューベルトの像が迎えてくれる。建物の前には，「菩提樹」の楽想を与えたという一本の菩提樹の木が立っている。

昨年2002年の夏，150年に一度といわれるほどの大洪水にヨーロッパも見舞われ，オーストリアやドイツ・チェコなど大被害を受けたが，ウィーンを除いて，このメードリンクやザルツブルグも川岸にその被害の痕を見ることであった。

ドイツロマン派の詩人ヴィルヘルム・ミューラー（1794～1827）の詩による作品「美しき水車小屋の娘」を作曲した1823年から４年後の1827年，同じミューラーの24の詩篇からなる詩集『冬の旅』をもとに，２月と10月に，歌曲集「冬の旅」を作曲している。現実と幻覚の間をさまよう男の冬の旅の重苦しい原詩の影響もあってか「冬の旅」は，「美しき水車小屋の娘」とは対照的に短調の作品が多い。1827年の３月26日彼の最も尊敬する作曲家ベートーベンがこの世を去り，病魔やベートーベンの死にうちひしがれるシューベルトの重苦しさや悲しみが反映されているのであろうか。1828年，ピアノソナタ第19番20番21番，「白鳥の歌」「岩上の羊飼い」等の作品を残し，11月19日その31年の短い生涯を閉じた。遺体はウィーン18区ヴェーリング墓地のベートーベンの墓の隣に埋葬された。現在はシューベルト公園として一角にベートーベンとシューベルトの旧墓碑が残されているが，筆者の留学中の下宿先の目の前であったことから，日々お参りしながら音楽学校に通ったものである。

ウィーンの楽聖たちの墓碑をあつめたウィーン市中央墓地の第32Ａ区画に，ベートーベンを中央に前にモーツァルト，右手にシューベルトと音楽家たちの墓碑が並んでいて献花が絶えない。

筆者の恩師ロベルト・ショルム先生もこの第40区画でウィーン少年合唱団の指導者グロースマンや名歌手エーリッヒ・クンツ等と眠っておられるので，折にふれて訪ねている。ウィーンには数々の貴重な文化財が見事に保存されており，６ヶ年の留学中には見つけられなかった新しい発見や資料収集を，ウィーンを訪ねる度に増やしていけることを幸せに思っている。自身の目で耳で肌で感じたことの全てが音楽の演奏活動や教育活動に反映されると信じている。留学中の1978年に，没後150年の演奏会や記念誌「Franz Shubert Wien 1978」が出版された。1997年にはシューベルト生誕200年の記念コンサートも各地で開催されたが，25年後の2028年には，没後200年の演奏会で，シューベルトのピアノ曲や歌曲集や室内楽を聴けることであろうか。

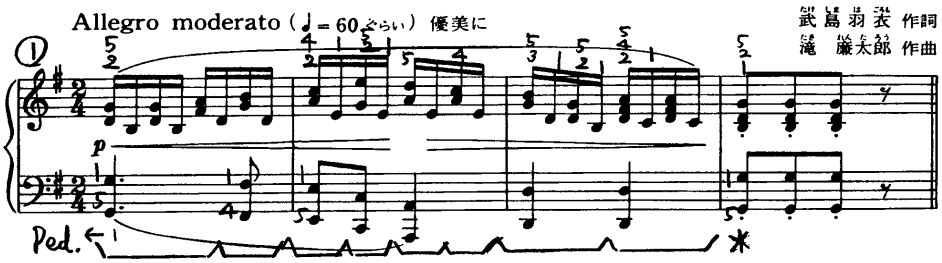
5．「花」「菩提樹」の伴奏と奏法について

（1）「花」の伴奏法について

「花」の原調は，上記に掲げたイ長調であるが，中学校の歌唱教材として歌われている長2度下のト長調の楽譜を使用していきたい。速度記号はAllegro moderatoと記されている。気をつけなければならないのは拍子である。大抵の場合4分の4拍子に歌われがちであるが，4分の2拍子である。歌詞に添って4小節をフレーズとして以下考察していく。

①－④小節（前奏）

先ず，右ペダルを踏み込んでおいて弾き始めるとペダルを踏む時の雑音がない。右手は和音の中に旋律線を出していく形になる。第5指のタッチが大切になってくる。筆者の場合，以下のような指使いとペダルを用いている。右手が上行形に対し左手のオクターブが下行形で当然ここではクレシェンドになるべきである。③小節でディミヌエンドして④小節は軽いスタッカートで奏し，テンポは緩めず歌の導入に結んでいく。



⑤－⑧小節（歌）

歌との音量のバランスに気をつけたい。⑤小節の歌の16分休符を明確にするためには右ペダルをハーフペダルと考えるくらいがよい。⑥－⑧小節の左手の旋律を生かしたい。右手の内声の第1指を強すぎないようにしたい。これは全曲を通して留意することである。

⑨－⑫小節

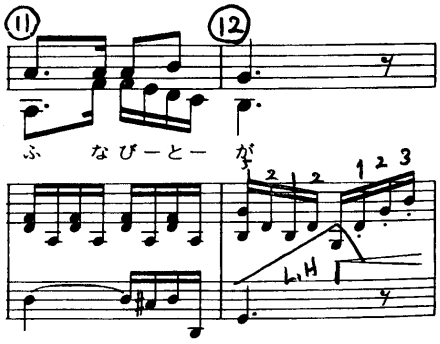
先の4小節と比較すると旋律がゆるやかな線を描く為，当然控えめな強さになる。よって，メゾピアノと記入してある。⑪小節は左手の16分音符の縦の線を歌と揃えて奏したい。⑫小節の2拍目の跳躍は最高音「櫂のしずくも」を引き出す為にクレッシェンドする。

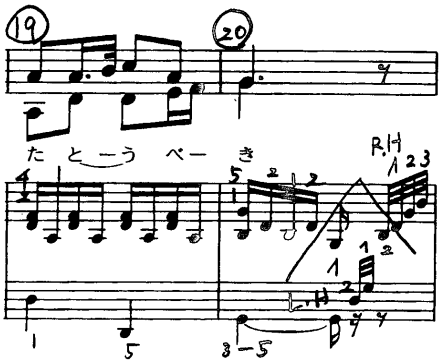
⑬－⑯小節

「かいの」「しずくも」「はなとちる」の間の16分休符を意識しながら明瞭な音で歌を生かしいきたい。⑮小節の右手は内声の第1指の旋律が荒くならないこと。⑯小節の左手軽いスタッカートでディミヌエンドして次のメゾフォルテにつなぐ。

⑰－⑳小節

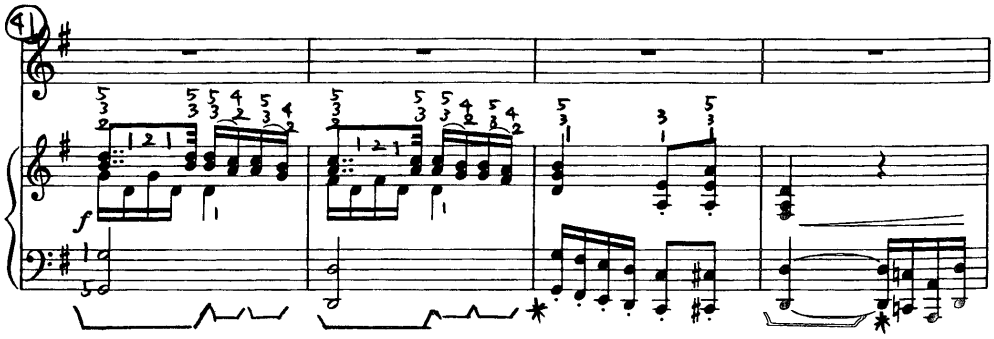
「たとうべき」の歌の弾んだリズムを生かしていきたい。⑳小節は筆者の指使いである。





㉑－㉔小節＆㊶－㊹小節（間奏）

なかなか弾きにくい箇所である。30年来この曲を演奏するたびに苦労している。1拍目の右手の32音符がそれである。内声の4番目のDの音を軽く，32分音符の右手重音を明瞭にする為には肘が少し右寄りに上がるはずである。そのままローリング，指先に手首からの重さを移動していくと無理なく自然な動きになっていく。



㊼－㊸（終結部）

「ながめをなにに」「たとうべき」は4拍子で考えると歌いやすい。フェルマータの箇所は歌い手や指揮者と必ず確認を取ることがのぞましい。「き」ではすでにア・テンポで速やかにまとめる方が軽やかに締めくくられる。

1番2番3番と，それぞれに詩の味わいや異なる情景を表現するために，音色や音質・ペダル・強弱など，常に歌に耳を傾けながら奏していきたいものである。

（2）「菩提樹」（Der Lindenbaum）の伴奏法について

シューベルトのピアノ伴奏は実に難しい。音が少なければ少ないほど，単純であればあるほど音楽性や中味が要求される。それに備える為の事前の準備はピアノに向かう以前の方がより多くの時間を必要とする。先ず，シューベルトの生涯とその時代背景について調べていく中で，楽曲の成り立ちが分る場合もある。そうでない場合は同時代の他の作品や又影響を受けた作曲家の作品から推測していくこともある。次は，原詩について意味・内容を知る為に，辞書で単語の意味からひとつ

ひとつ調べて旋律線と比較していく。同時に作詞者のことも，作曲者との関わりを含め可能な限り資料を探す。

筆者は30年来ピアノ伴奏法の研究に取り組んでいるが，1977年～1981年および1987年～1988年と学んだウィーン国立音楽大学のピアノ伴奏科では，卒業必修科目に下記のような講義の受講が義務づけられた。ドイツ語Ⅰ・Ⅱ，イタリア語・フランス語・和声学・聴音・初見および移調・楽器学・詩の朗読および解釈，伴奏学，そして実技演習としてピアノソロ・歌手と組んでのピアノ伴奏・チェンバロ奏法および通奏低音と，月曜日から土曜日まで充実した時間割の中での学びの時をすごした。単位修得の後，いよいよ卒業試験にのぞむことができたわけである。

古典作品から恩師ショルム教授の作品などの20世紀の現代作品までのピアノ曲や，歌曲，オペラや合唱曲など取り組んだわけだが，先ず最初の壁は何と言っても言葉，即ち原語の意味であった。

留学して３年目あたりから講義に何とかついていけるようになった次第であった。作品の手がかりになるものに同時代の絵画がある。ウィーンは音楽の都・美術の都である。演奏曲目が決まると美術館に足を運ぶこと度々だった。例えばアルバン・ベルクやシェーンベルクやマルクスではグスタフ・クリムトの絵，ラベルやドビュッシー等はルノアールやモネの絵など，絵画の中からヒントを得ることも大きかった。ウィーンの街中にはベートーベンやモーツァルトやシューベルトは勿論のこと，ウィーンに集った多くの音楽家たちの足跡が見られ，そこここに赤白の旗と由来の刻まれた銘板とを目にすることがしばしばである。博物館や記念館になっている場合も，またそのままヴォーヌンク（住居）として使用されているものも多い。作曲した家，また住んでいた家，生家や生涯を終えた家，教会や学校にいたるまで，街角のいたる所にその時代の生きた材料がいっぱいである。筆者は機会をとらえては自分自身の目で確かめ，くまなく訪ね歩くことを最大の喜びとしている。今回の「菩提樹」にしても「冬の旅」全曲を研究・演奏した中での検討である。

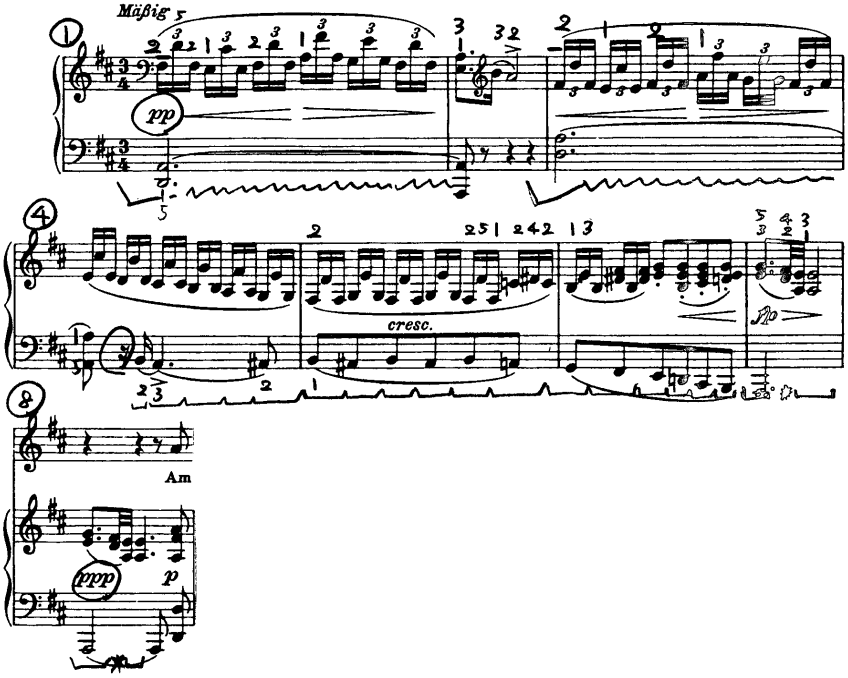
原調はホ長調，４分の３拍子，速度は Mäßig と記されている。楽譜は，Edition Peters の Nr. 20c を使用する。低声用楽譜である。上記でも述べたように今回の共演者，日本を代表するバス・バリトンのオペラ歌手・演出家・二期会の理事でもある池田直樹氏のプログラムの中でも演奏することから，低声用のニ長調を検討していくことにする。ちなみに，池田氏は河合隼雄・阪田寛夫・谷川俊太郎の各氏とともに「声の力」（岩波書店）の著者でもあり，子どもの歌の研究および各地での演奏もおこなっておられることも加えておきたい。

「菩提樹」はあまりにも名高い作品で，「冬の旅」全曲の中で単独に歌われることも多い。最初の長調の曲で，反復形式を巧みに変化させた曲になっている。先ず，ピアノによる８小節の前奏があり16分音符の３連音で動く右手が風のざわめきや不安な心を表現していく。

①－⑧小節（前奏）

ペダルは左のソフトペダル（ウナコルダ）も使用し，右のペダルは踏み込んでおく。①と③小節の第１音の Fis の音は少し長めに弾き，主和音の第３音の響きを明瞭にして16分音符の風の動きへと発展させていく。筆者はこの三連符は次のように指使いを決めてみた。調性で指使いも変えざる

を得ない場合もあるが，確実に演奏できるためにはふさわしい指使いの工夫は大切である。②小節の２分音符は充分のばし，消え行く音量をつなぎ③小節にもっていくとよい。④小節の左手のＡの符点４分音符は，はっきりと⑤⑥小節につながなければならない。右のペダルはすみやかに踏んで放す，ヴァイブレーティングペダルを用いると音の濁りをふせげると考える。旅を始めた青年がほっと息をつく場所が，この⑦⑧小節だろう。⑧小節は ppp となっているので，エコーと考え細心の注意を払って，右手指先の平面を使い奏すると良い。



⑨－㉔小節（Am Brunnen ～ immer fort）

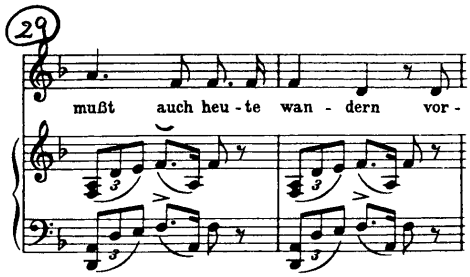
第一節の歌詞で歌われる⑨から㉔小節は，菩提樹の木陰で夢見た幸せな思いに励まされながらの歌にふさわしい伴奏でありたい。Tore，Traum，Rinde，Wort，Freud，Leide などの名詞の箇所を特に強調していくとよい。また süßen（甘い）や träumt（夢見た）などの歌詞の箇所が荒い音にならないように配慮していかねばならない。歌詞や内容が把握できれば，おのずと作曲者の記入の強弱にも納得がいくようになる。ここでもなるべく４小節を一単位として歌っていくとよい。声を出さずともピアノ伴奏者は歌い手とともに常に歌っているわけである。

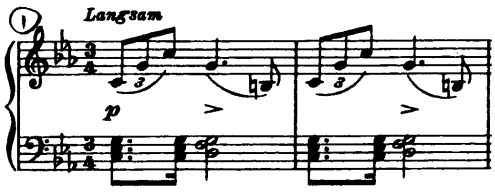
㉕－㉘小節（間奏）

再びさわさわと三連符のモチーフが登場するが，同名調のニ短調に変わり，心の重さを表現した第二節への導入になっていく。㉖㉘小節の16分音符と２分音符の箇所は右手から左手に移動するが，旅人の溜息のような気がする。アクセントのついたＡの音は充分のばす。左手の低音は慎重に奏すれば奏するほど第二節の不吉な感じが引き出せる。

㉙－㊹小節

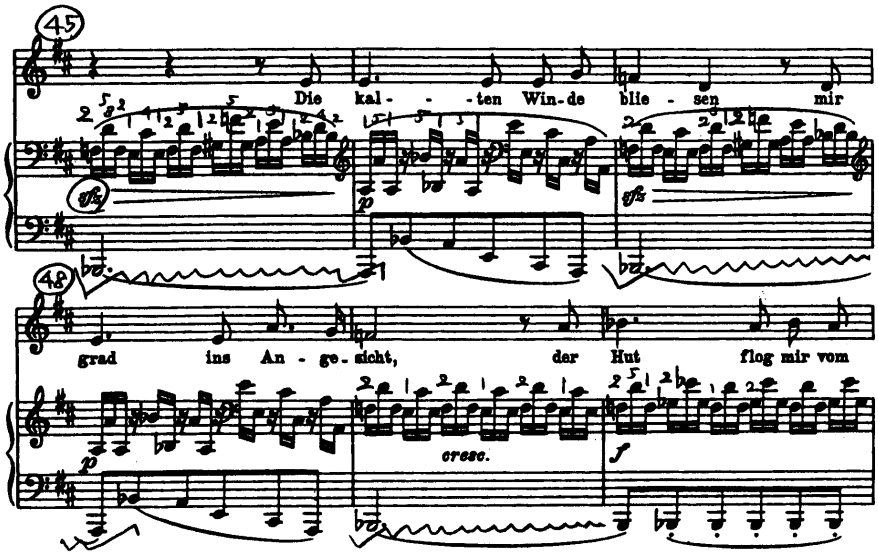
前半の，それでもなお暗い闇の中を旅して行かねばならない男の哀しみをニ短調に，サワサワと風にそよぐ枝が旅人に「ここにこそ安らぎを見出せる」と語りかける後半はニ長調にと転調する。㉙小節以下同様のリズムで奏される箇所，三連符と符点８分音符16分音符の１拍目と２拍目は二通りの解釈がある。６曲目の「あふるる涙」と同様，二つの音形をいかにするかということである。筆者は２拍目のリズムは旅人の重い足を引きずって歩く音，「あふるる涙」ではポタッと落ちる涙の音と考えて奏している。㊹小節の８分休符は意味大で，この沈黙を破って劇的なスフォルツァンドが㊺小節の頭に登場する。

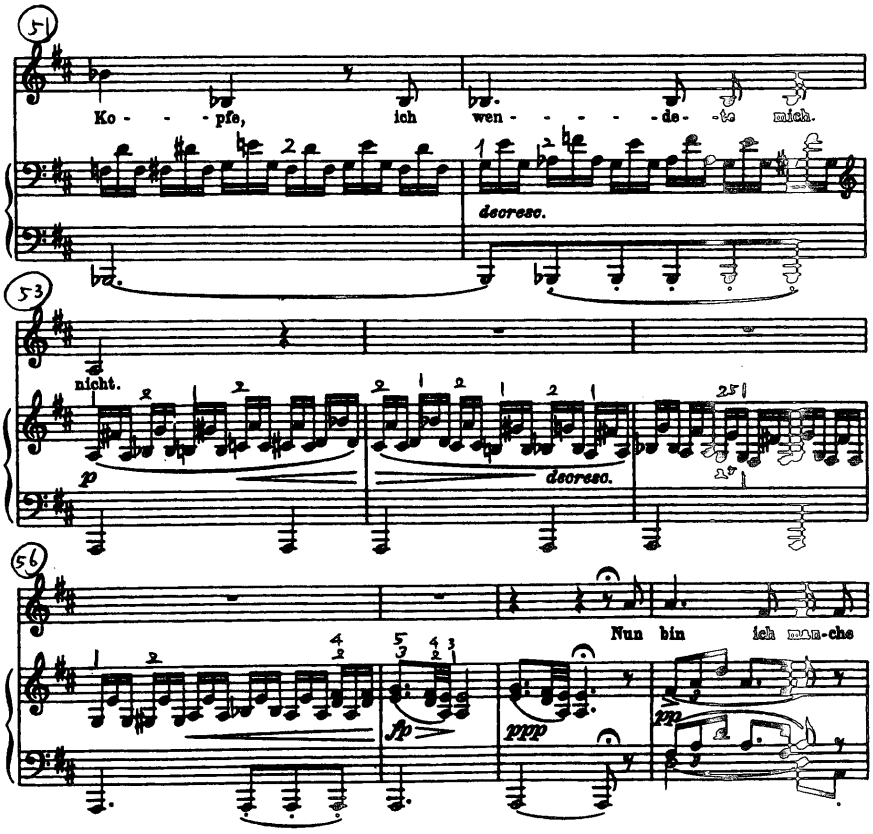




㊺－㊽小節

この第三節は自由な表情でドラマティックに歌われるところである。冷たい風が男の顔に吹きつける。頭から帽子もクルクルと風に飛び去るが，男は振り向こうともしない。吹きすさぶ風，渦巻く風を，常に短く細かくペダルを踏んで放すヴァイブレーティングペダルを用いて表現すると良い。歌い手の低音に配慮しながら，表情豊かに奏したい。再び風が瞬間的に吹き荒れ，最後の節へと進んで静かにおさまる。冒頭のテンポは mäßig と記されていたが，各節によって変化するのが当然であるので，決してエチュード（練習曲）のように伴奏してはならないことは明白である。ここでは筆者は次の指使いで伴奏している。





⑲－⑯小節

第四節は，遠い過去に思いを馳せる旅人が，ふたたび懐かしいあのささやきを聴くというところである。⑱小節の長いフェルマータの後，ピアノの音が消えて，歌い手が充分に息を吸って「Nun」と歌い出してから pp で弾き始める。ここで第一節と同じニ長調にもどる。伴奏の三連符の音形は，ここから安らぎの音となる。タッチは柔らかい音を出すために指先を平たく鍵盤に乗せると効果的である。「Nun bin Ich manche Stunde」［und immer hör Ich raushen］では右手がオクターブで奏されるのでレガートになるように奏し，ここで一番の山になっている箇所の「du fändest Ruhe dort」へ次第に音楽を高め，もう一度繰り返される「ここにお前は安らぎをみいだす」の間の三連符の音形をたっぷり歌いたい。「Ruhe」は⑭小節の８分音符と⑯小節の三連符とリズムが異なるところも充分気をつけて「安らぎ」にふさわしい音色にしたい。

⑰－⑫小節（後奏）

前奏と同じように６度の音程で，風のさわさわと音を立てる音楽で終わっている。ここでの左手の旋律にも充分留意したい。ペダルは勿論ヴァイブレーティングペダルを使い，最後のニ長調のトニカ（主和音）の和音は手首を鍵盤の上で静かにおろすと自然な dim. ができる。

「冬の旅」は全24曲中３分の２以上が短調で書かれ，全体を通して重苦しい感じが「美しき水車小屋の娘」とは対照的であるが，味わい深いすばらしい作品である。これまで，筆者も留学中に，ヘルマン・プライ，ペーター・シュライヤー等の「冬の旅」全曲生演奏を聴き感銘を受けたもので

あるが，ピアノはマウリィツィオ・ポリーニ，イエルク・デームス，エリック・ヴェルバと世界超一流のピアニスト達と深い味わいでのピアノ伴奏に，ピアノ伴奏への意欲が益々湧くきっかけにもなった。

最近は，ポスターやプログラムにもピアノ伴奏者の名前がしっかりと紹介されるようになり，ピアノ伴奏者として嬉しいかぎりであるが，できれば「ピアノ伴奏者」ではなくヨーロッパでと同様に「Am Klavier（ピアノ）」となる日を望みたい。伴奏は単に伴奏ではなく，共演である。音楽の基礎を成す土台である。

6．おわりに

今回は，先にも述べているように，次世代に歌い継いでほしい日本と外国の曲から「花」と「菩提樹」の一曲づつを選び，各々に研究の題材として考察してきた。ピアノ伴奏が基本的に楽曲の音楽構造の基礎をなすものであることを認識し，共演者や児童・生徒が安心して歌っていけるように，音楽的・技術的両面を考慮にいれた研究と実践をこれからも継続していきたいと思っている。今後も，微力ではあるが，ピアノ伴奏を通して，教育活動・社会活動の中で貢献していきたいと考えている。

引用・参考文献

1．文部省「小学校学習指導要領解説　音楽編」付録４　Ｐ109　1999年
2．小長久子編「瀧廉太郎　全曲集」音楽の友社　P30－35　1993年
3．音楽写真文庫「瀧廉太郎」音楽の友社　1961年
4．鮎川哲也「唱歌のふるさと　花」音楽の友社　1992年
5．畑中良輔著「日本歌曲について」日本歌曲全集　Ｐ30－31　1991年
6．「中学音楽３」教科書　教育出版株式会社　Ｐ４－７　1986年
7．「中学音楽３　教師用指導書」教育出版株式会社　1986年
8．読売新聞文化部「童謡・唱歌ものがたり」岩波書店　2000年
9．稲生永（いのうひさし）「シューベルト音楽散歩」music gallery　1998年
10. Gerald・Moor：「Schuberts liederzyklen」Bärenreiter Verlag　1978年
11. Gerald・Moor 著　竹内ふみ子訳「シューベルト三大歌曲集」シンフォニア　1983年
12. Helmut・Deutsch 著　鮫島有美子訳「伴奏の芸術」ムジカノーヴァ　1998年
13. K. U. Schnabel 著　青木和子訳「ペダルの現代技法」音楽の友社　1970年
14. Hans・Kann 著「ピアノ演奏おぼえがき」音楽の友社　1987年
15. 高崎安男解説・訳「フィッシャー・ディスカウと冬の旅」グラムフォン　1966年
16. 「Franz Schubert」Universal Edition　Wien　1978年
17. SCHUBERT LIDER Ⅰ Ausgabe für tiefe Stimme　EDITION PETERS
18. 寺薗玲子「ピアノ伴奏の手法とその指導法の研究Ⅰ」鹿児島女子短期大学紀要第35号　2000年
19. 寺薗玲子「ピアノ伴奏の手法とその指導法の研究Ⅱ」鹿児島女子短期大学紀要第36号　2001年
20. 寺薗玲子「ピアノ伴奏の手法とその指導法の研究Ⅲ」鹿児島女子短期大学紀要第37号　2002年
21. 寺薗玲子「ピアノ伴奏の手法とその指導法の研究Ⅳ」鹿児島女子短期大学紀要第38号　2003年